

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第二1:8～11 「神により頼む者」

[8-9]「兄弟たちよ。私たちがアジャで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはのちさえも危うくなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」

ここで言う「アジャ」とは、ローマ帝国の行政上の区分による州名で今の小アジアの西部地域のこと。その中心的な町がパウロが3年近く滞在し伝道したエペソ。

このエペソでパウロは特に多くの苦しみを受けた。→使徒19章、Ⅱテモテ3:12

そしてこの非常な迫害の結果、彼はついに自分の心の中で死を覚悟したと言う。パウロの福音宣教はまだまだ多くの地域で進められなければならない。ここで彼が死んだら、その働きはどうなるのか。もはや万事休すのような状態で、彼は自分自身の力ではなく、死者をよみがえらせることのできる全能の神により頼む者となるようにさせられたのである。

[10]「ところが神は、これほどの大きな危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神においているのです」

死を覚悟するほどの迫害に追い込まれ、神にのみより頼む者となったパウロを神は実際に救い出してくださいました。神はご自分により頼む者たちを苦しめるだけ苦しめ、突き放してしまうようなお方ではない。過去もそうであったし、将来も確実にそうであるし、現在これからもそうなのである。この不動の岩なるまことの神、力ある神、恵み深い神にパウロは望みを置いており、また私たちも望みを置くべき神なのである。

[11]「あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださるでしょう。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです」

パウロはとりなしの祈りがクリスチャンどうしを堅く結びつけるものであることを知っていた。このような祈りがささげられるところに、キリストのいのちがお互いに通い合うようになる。祈りこそ一致の秘訣であり、問題解決への道である。多くの人々が祈れば祈るほど、祈られる側に恵みが与えられる。一人で個人的に祈ることも大切であるが、皆で熱心に祈ることも豊かな恵みが与えられるのである。エルサレムで弟子たちが心を合わせて祈っていた時、何が起こったか。

→使徒1～2章、4:23～31、12:1～11

主は熱心に祈る者たちの祈りに答えて豊かな恵みを与えてくださる。そしてそのようにして与えられた豊かな恵みについて、また多くの人々が感謝をささげるようになるのである。パウロはこのような祈りによる協力を求めることによって、コリント教会の一致を願っているのである。